

## お金の進化論

神戸大学経済経営研究所  
附属政策研究リエゾンセンター  
教授 鎮目 雅人

(はじめに)

このコラムでは、お金 = 通貨の発行・流通について、歴史を振り返りながら考えてみたいと思います。

現在の日本では日本銀行が円紙幣を発行しています。米国では連邦準備制度 (Federal Reserve System) がドル紙幣を発行しています。ヨーロッパのユーロ圏諸国では欧州中央銀行と各国中央銀行からなる欧州中央銀行制度 (European System of Central Banks) がユーロ紙幣を発行しています。現在、世界のほとんどの地域では、定められた領域の中で通貨発行と金融政策を中央銀行が一元的に行なうことが一般的になっています。ユーロの導入は、国家の領域を超えた通貨の統一という意味で大きな実験といえることができますが、1つの地域に1つだけの通貨が存在するという意味では、日本や米国のシステムと共通するものといえます。

現代におけるお金 = 通貨の発行・流通システムは、いくつかの側面から捉えることができます。第1に、ある通貨が流通する領域が国境という境界線によって相互に区切られている「閉鎖的」空間であるという側面です。第2に、ある領域内で流通する通貨が「一元的」な体系によって統一されているという側面です。第3に、通貨を使用する当事者にとって、取引に使用する通貨の選択の自由がなく、経済取引に使用する通貨が事実上「強制的」に決められているという側面です。もちろん、いくつかの例外はありますが、日本の円が流通する領域は日本国内であり、日本国内で流通する通貨は円という単一の体系に統一されていて、通常の場合、われわれが日本国内で円以外の通貨で経済取引を行なうことは困難です。

私たちが当然のことのように考えている現代の通貨システムは、いつ頃から、どのようなかたちで存在しているのでしょうか。

(近世以前の通貨システム)

海外ならびに日本国内のお金 = 通貨の発行・流通システムに関するこれまでの研究によると、1国(地域)1通貨というシステムは、歴史的には近代の産物であり、近世以前の通貨システムは、より多様性に富んだものであったことが明らかになっています。

例えば、日本では、平安時代の末頃（12世紀）から江戸時代の初め（17世紀）まで、主として中国から輸入されたさまざまな銭（渡来銭）が各地でお金＝通貨として使われていたことが分かっています。また、江戸時代の日本では、幕府による通貨発行の管理が進みましたが、その仕組みは「三貨制度」と呼ばれ、金貨、銀貨、銭貨が並行的に通貨として使われていました。具体的には、「両」を基本単位とする大判、小判という定型化された（楕円形の）金貨、重さの単位である「匁」で量られる丁銀や豆板銀といった銀貨、「文」を単位とする定型化された（丸くて中央に四角い穴の開いた）銭貨、といった異なる種類の通貨が同時に流通していました<sup>1</sup>。このうち、金貨、銀貨は主として高額取引に使用され、銭貨は主として日常の小額取引に使用されたといわれています。また、各領主が支配する領地では、金貨、銀貨、銭貨建ての藩札などの紙幣が発行され、主として領地内で流通していましたが、こうした札は領地外でも流通することがありました。ここで強調したい点は、金貨、銀貨、銭貨などの通貨は、それぞれが独立した体系を持つ本位貨幣であり、単に材質が異なるというだけでなく、日本国内においてそれぞれの通貨の間に為替相場が成立し、変動していたという点です。さらに、藩札などの紙幣の相場は、本位貨幣間の相場だけでなく、発行主体である藩などの信用状態によっても、変動していました。江戸時代中期（18世紀後半）以降になると、幕府は秤量銀貨とは別に金貨の補助貨幣としての計数銀貨（8枚が小判1両に相当する「二朱銀」など）を発行し、金貨の体系による通貨の統一を図ろうとしましたが、実際には、秤量銀貨の単位を用いた経済取引は、幕末まで大阪を中心に広く行なわれていました。例えば、先駆的な先物市場として今日世界的に有名な江戸時代の大阪堂島の米相場は、秤量銀貨の単位である「匁」建てで取引されていました。

国境を越えたお金＝通貨の使用についてはどうだったでしょうか。何世紀もの間、日本国内で海外から渡来した銭が流通していたことは先に述べましたが、日本の国外でも日本の通貨が流通していた形跡があります。朝鮮半島や中国では、主に戦国時代から江戸時代にかけて、日本との貿易に日本の秤量銀貨が用いられたことが知られています。また、鎖国が完成した1630年代から作られ、江戸時代を通じて日本国内で広く流通した寛永通宝という銭がありますが、最近の考古学的研究により、同じ時代の中国各地やベトナムで、現地の銭に混じって寛永通宝が使われていたことが明らかになってきました。鎖国政策により対外取引を厳しく規制していた日本の通貨でさえ、他の通貨に混じってアジア各地で使われていたことからみて、近世の東アジアでは、通貨は国境を越えて流通していたということが出来ます。

このように、近世以前のアジアでは、ひとつの通貨が国や領地などの境を越えて流通していたので、ある通貨が流通する地理的領域は「開放的」であったということが出来ます。また、ひとつの国や地域の中に複数の通貨が並存していたので、地域内での通貨の流通形態は「多層的」であったということが出来ます。さらに、（庶民はともかく）活発に経済

---

<sup>1</sup> 大判、小判や銭のように定型化され、枚数を数えて使われるお金を計数貨幣、丁銀や豆板銀のように重さを量って使われるお金を秤量貨幣と呼びます。

活動を営む商人などは、どの通貨を使用するかを取引の種類に応じて自ら選んでいたもので、個々の経済主体にとって取引に使用する通貨の選択は「自発的」な面があったといえることができます。

東京大学東洋文化研究所の黒田明伸氏は、近世以前にみられた、主として小額の地域内取引に使用される地域内決済通貨と、主として複数の地域にまたがる高額取引に使用される広域的決済通貨が並存する通貨システムを「重層的」通貨システムと呼び、ある通貨の使用について自発的に緩やかな合意をしていた人々の集まりを「支払協同体」と呼んでいます（黒田明伸[2003]『貨幣システムの世界史』ほか）。黒田氏によれば、同様の事例は、アジアにとどまらず、世界各地でみられたとされています。

#### （近代の通貨システムへの移行）

それでは、近世以前の通貨システムから、近代の通貨システムへの移行は、どのようになされたのでしょうか。日本を例にとってみていきたいと思います。

日本では、明治時代に近代通貨システムの導入が行なわれました。その過程は、大きく3つの局面に分けることができます。第1の局面は、円という単一の通貨単位の導入であり、第2の局面は、日本銀行の設立と日本銀行券の発行、つまり中央銀行による独占的な通貨の発行であり、第3の局面は、国内通貨である円を当時の国際決済通貨であった銀や金と交換できるようにすること、具体的には銀本位制の確立と金本位制への移行でした。

日本における近代通貨システムの導入は、決して直線的に行なわれたわけではなく、多くの試行錯誤を経て行なわれたことが分かっています。明治政府は、明治4（1871）年に新貨条例を制定し、従来の両（金貨）、匁（銀貨）、文（銭貨）という多元的な通貨単位を改め、「円」に統一すると同時に、金本位制を宣言しました。しかしながら、十分な金準備を維持することができなかつたため、金本位制については名目的なものにとどまり、政府が発行した紙幣は不換紙幣となりました。

明治5（1872）年には、米国視察から帰国した伊藤博文等の意見を容れて国立銀行条例が制定され、米国のNational Bankシステムに倣って各地に銀行券を発行する国立銀行が設立されることとなり、分権的な通貨発行システムが導入されました。伊藤等の進言の背景には、国内市場の統合が進んでおらず、国内各地域の経済の独立性が高かった当時の日本においては、米国のシステムが実情に合っているとの判断があったといわれています。

これに対して、松方正義を中心とするグループは、欧州の制度を参考に、通貨の発行を一元的に行う中央銀行の設立を主張しました。結局はその主張が容れられ、明治15（1882）年に日本銀行が設立され、その3年後の明治18（1885）年から一定額の銀貨との交換（兌換）が保証された日本銀行券が発行されました。この時点をもって、中央銀行による独占的な通貨発行と、国内通貨の国際決済通貨（この場合は銀）との交換性が達成されたといえます。

さらに、明治30（1897）年に至り、日本政府は日清戦争の賠償金を原資として金準備を

整え、日本銀行券の金との兌換を保証することとなり、日本は銀本位制から金本位制へ移行しました。19世紀後半の世界では、各国とくに欧州諸国は銀本位制から金本位制へと移行する動きが盛んでしたので、日本もそうした世界の趨勢に追随したとみることもできます。このように、日本における近代通貨システムへの移行は、30年近くをかけ、試行錯誤を繰り返しながら行なわれたということが出来ます。

(お金 = 通貨の歴史を考える視点)

今日の目からみて、近世以前の通貨システムは「遅れた」ものだったのでしょうか。日本が「円」という統一通貨を導入した明治時代に政府によって書かれた歴史書には、江戸時代以前の日本の通貨システムは「遅れた」もので、非常に混乱していたという認識が示されていました。しかしながら、最近では、近世以前の通貨システムも、当時のさまざまな条件の下で相応の合理的な背景があって存続していたとする研究が増えてきています。そして、近世から近代の通貨システムの移行についても、必然的な進歩 (progress) というよりは、さまざまな政治的・経済的・社会的条件の変化に対応した進化 (evolution) として捉える見方が出てきています。

通貨を使う人、例えば商人や旅行者の立場に立ってみると、近世以前の通貨システムのもとでは、取引コストの面で、通貨を使う人にとっては余計な手間や出費がかさみます。複数の通貨が並行して流通していた江戸時代には、両替商と呼ばれる金融業者が、手数料をとって各種の通貨の交換を行っていました。両替のコストは、通貨を使用する商人や旅行者が負担していたこととなります。これによって円滑な交易、広域的な市場の発達に阻害され、結果として、経済の効率性が損なわれる面もあったと思われます。その反面、通貨を使う人には、取引当事者間の合意により使用通貨を選択する自由があったということが出来ます。通貨の発行者 (江戸時代の日本であれば、幕府や藩など) が自らの都合で必要以上に通貨を発行したために貨幣価値が下落してしまうような場合には、その通貨を使わずに別の通貨を使うようにすればよいわけです。また、対外的な要因によって高額取引に使われる通貨の相場が変動しても、地域内部の日常的な小額取引はその影響を免れることができたという面もあったと思われます。その結果、個々の通貨には消長があったにしても、全体としての通貨システムは柔軟に生き長らえてきたと考えることもできます。F.A.ハイエクが *Denationalisation of Money* [1976] (川口慎二訳『通貨発行自由化論』) で想定していたような競争的な貨幣発行の形態が、維持されてきたともいえます。

世界各国の通貨システムの歴史をみると、さまざまなバリエーションがみられます。例えば、米国では、国内で使用される通貨がドルに統一されたのは南北戦争後であり、その後も各地の銀行や政府が発行するドル紙幣が混在していて、中央銀行である連邦準備制度が設立されたのは1914年のことでした。また、中国では、1935年に幣制改革が実施されましたが、少なくともその時期まで、銀貨や銭貨、外国銀行が発行する紙幣など、多様な通貨が流通していました。近代的な通貨システムが最初に生まれたヨーロッパでも、一部

の地域（ドイツなど）では、近世以前の「開放的」で「多層的」な通貨流通が19世紀の遅い時期まで残っていたともいわれています。

長い歴史の中では、世界のほとんどの地域で、ひとつの国や地域に種類のお金だけが流通しているような今日の状況は、むしろ例外的といえるのかもしれませんが。また、未来においては、われわれになじみ深い近代・現代の通貨システムが変容する可能性も、否定はできないと思います。国境を越えた経済取引では、決済通貨の選択は取引当事者の選択に委ねられることとなります。また、世界のいくつかの国や地域では、領域内で外国通貨が一般的に流通する「ドル化」「ユーロ化」と呼ばれる現象がみられます（その際、自国通貨が完全に駆逐されるのではなく、自国通貨を含めた複数の通貨が同時に流通する場合もみられます）。さらには、インターネットの世界だけで通用する仮想通貨が生まれたりもしています。その一方で、国内の限られた地域や特定の問題意識を共有する仲間うちだけで通用する「地域通貨」の利用も増えてきています。1国1通貨の前提が揺らぎつつある世界になってきているともいえます。

ここまで、日本を中心とする近世から近代の通貨システムへの移行の経緯をみてきましたが、実は、こうした通貨システムの移行が「なぜ、どのような背景で」起ったのかについては、よくわかっていないことが多くあります。お金＝通貨の歴史をさらに深く研究することで、現代や将来の通貨システムを考える上で有益な示唆が得られると考えています。また、日本の経験を、同時期の他の地域における経験と比較検討することで、さらに多くの知見が得られるとも考えています。その際、お金＝通貨の歴史を考えるにあたって、ポイントとなる視点がいくつか存在するのではないかと考えています。これらの視点は、これまでのお金＝通貨の歴史をめぐる研究のなかで採り上げられたこともあり、全く新しい視点とはいえない面もありますが、これまでの研究では、必ずしも実証的に明らかにされてこなかったと考えられます。

第1のポイントは、市場での経済取引の実態です。J.R.ヒックスが *A Theory of Economic History*[1969]（新保博訳『経済史の理論』）のなかで述べているように、お金＝通貨の本来的な機能は、市場取引の媒介物です。社会的なインフラストラクチャーとしてのお金＝通貨の流通のあり方が、商品やサービスの売買、信用・貸借など市場におけるさまざまな経済取引のあり方を規定する一方で、市場取引のあり方が通貨の使われ方を規定していた面もあったと考えられます。その意味で、例えば日本の江戸時代から明治時代にかけての国内市場の統合の度合いを含め、個々の経済取引との関係のなかで通貨の使用実態を解明していくことが重要ではないかと考えています。

第2のポイントは、公的権力と民間経済主体との関係です。中央銀行のような公的な主体が提供する通貨が民間の取引において独占的に流通する背景には、財政活動が経済のなかで大きな役割を占めるとか、民間経済取引を円滑に行なうために公的権力が必要とされるなど、経済取引への公的な介入が民間経済主体によって受容されるような状況が生まれていたのかもしれませんが。第3のポイントとも関連しますが、国民国家の成立、帝国主義

といった概念を、通貨システムの観点から見直してみる必要があるかもしれません。

第3のポイントは、外的な要因の果たした影響です。19世紀後半以降のグローバル化の流れ、とりわけ欧米諸国のアジア進出は、政治、経済、社会、文化等のさまざまな側面で、日本のおかれた環境を大きく変えました。そうした世界的な変化が、日本の通貨システムのあり方にどのような影響を与えたのか、また、日本で起った変化が同じ時代のアジアの他地域や欧米に影響を与えたことがなかったかについても、検討することが有用ではないかと考えています。

お金＝通貨が市場取引の媒介物であるということから、通貨の進化は、市場経済の変遷を写す鏡であるということもできます。通貨の進化の過程を知ることで、市場経済の働きを考える上でのヒントを得ることができるのではないかと考えています。